

特集

災害医療

それぞれの10年を振り返って

2011年3月11日14時46分、日本の観測史上最大規模の地震が東北地方を襲いました。東北地方太平洋沖地震、東日本大震災です。死者・行方不明者は20,000人近くに及び、大規模な自然災害の脅威をまざまざとみせつけられたと同時に、津波災害の破壊力、原子力発電所事故の混乱、新興住宅地における液状化現象、都市部における帰宅難民の発生など、これまでの災害対策では対応しきれない、数々の問題が浮き彫りになりました。さらには、長期にわたる避難所での生活環境問題、被災者・支援者等の精神的問題、有事の際に診療を継続するBCP確立の重要性といった課題も掲げられました。

2021年3月11日、あの日から10年が経過します。多くの人々の努力によって、元通りではなくとも地域の復興は進み、社会生活や保健福祉、医療も日常を取り戻してきたと思われれます。その一方で、当時の記録や記憶は少しずつ、風化している部分があるかもしれません。また、本誌読者のなかにも例えば東日本大震災を学生時代に経験し、なかなか実感が伴わない方もいるでしょう。であるからこそ、10年の節目にあたるこのタイミングで、われわれが経験したかつてない規模の自然災害が起きたあ のとき、何が起きて、どんな問題が浮き彫りになったのかを、救急医療に携わる皆様に改めてお伝えしたいと思います。今日まで10年の月日を経て、何が、どのように変わってきたのかを紙面の記録として残すことは、“救急医学”を冠にする本誌の重要な責務であるはずで

今こそ、「災害医療」の10年をテーマにした特集号をお届けします。

今回ご執筆いただいた先生方には、災害対応にあたった医療現場、災害対策にあ たった行政機関、そして現場派遣に応じた救急医など、さまざまな立場・テーマから “それぞれの10年”を振り返り、当時浮き彫りになった課題・問題に対してこの10年 でどのような対応策が構築されてきたのか、現場でご苦労を重ねられた先生方の “生の声”を頂戴しました。貴重な経験と、問題解決に正面から取り組まれた10年間の道筋が、本特集を通じレガシーとして次の世代に伝えられ、そして、いつか “そのとき”の備えにつながることを願っております。

『救急医学』編集委員会

企画担当：筑波大学医学医療系救急・集中治療医学 井上 貴昭